

# 第二章

## 神父への道

終身誓願を立て、スイスの神学校へ



## 戦後のどさくさの中で上智大学へ進学、終身誓願を立てる

原爆が落ちて1週間で終戦になりました。しばらくは家に居たのですが、マリア会の本部から早く戻るようにという指令が来たので、東京に帰りました。サツマイモを持って、鈴なりの貨物列車に乗り込んで東京に向かいました。

翌年の1946年(昭和21年)、カトリックの神父になるために必要なラテン語と哲学を学ぶべく、上智大学に進学。ラテン哲学科は神父を目指している学生が多い科でした。その頃の上智大学は、まだ小さな大学で男子ばかり。終戦後のどさくさの時代だったので、ちょうど予科と本科の切り替えがあり、5年間在籍しました。最初の2年間はラテン語をみっちりやり、その後3年間哲学を勉強したんです。

全世界から集まった100人ほどの宣教師が指導してくれ、授業内容は充実していました。出欠をキチンと取り、遅刻・代返はもつてのほか。高等学校より厳しい教育でした。特にラ哲は厳しく、ラテン語ができないと落第でした。

ひたすら勉強に明け暮れた5年間でしたが、戦後のどさくさで食べる物も着る物も、何もかもがない時代でした。街ではヤミ屋やカツギ屋が横行していましたが、私には関係ない世界のこと。すでに修道士になっていた私はお金を持っていなかったため、食堂に入ることもなかったんです。だから、友達が何回かお茶をご馳走してくれるようなこともありましたね。

大学を卒業すると、終身誓願を立て、神父になることが認められました。初誓願から6年後でした。毎年、誓願を更新し、辞めていく人たちも見ていましたから、神父になるのは自分の選んだ道という覚悟はできていました。無期誓願とも言うのですが、終身誓願の式では、床に腹這いになってその上から棺桶をかぶせます。

もはや、俗社会では死んだという意味なのです。実際、親が病気であつても帰してくれません。もちろん、親が死んだ時は帰れますが、それだけの信念がなければ、神父にはなれないのです。

終身誓願を立てたからには、修道会の本部の命令が出ればそれに従わなければいけません。会社の辞令のようなものですが、私たちはそれを一生抱え込まなければいけません。会社の辞令のよう。

戦争中に大勢の神父が軍隊に入隊して、戦死者も多数出ていました。だから、神父が不足していたのでしよう。できるだけ早く神父を養成したいという事情があったらしく、私は大学を卒業した年の夏には、スイスの神学校への進学を指示されました。

## 横浜港から「ラ・マルセイエズ号」でフランスへ出航

1951年(昭和26年)8月、スイスのフリブル大学神学部へ進むため横浜港から「ラ・マルセイエズ号」でフランスに向かいました。マッカーサーが解任され、サンフランシスコ講和条約が調印された年です。前年には朝鮮戦争が勃発。特需景気で経済が上向き始めたとはいえ、まだまだ物のない時代が続いていました。

横浜港で「ラ・マルセイエズ号」に乗り込んだ途端、国際社会に身をおくことになりました。私は修道院で生活していた時にフランス人やアメリカ人の宣教師がいましたから、外国人の生活スタイルには多少慣れていたので、船の中は完全な外国の社会になり、やはりカルチャーショックはありません。

まず、食事。1人でフルコース式の食事を食べるのは初めてのことで、ステーキにジャガイモやコンフレ

